

平安京跡 (学林町)

調査期間：令和4年8月1日(月)～ 9月2日(金)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡」の、左京七条二坊十六町跡にあたります(図1)。ここに個人住宅兼共同住宅が計画され、これを受けて実施した試掘調査で、平安時代から江戸時代の遺跡が遺存していることを確認したことから、発掘調査を実施しました。

発掘調査は令和4年8月1日～9月2日まで、作業日数は延べ23日、面積59.5㎡を対象に実施しました。

2 調査地周辺の記録

『仁和寺所蔵古図』によれば、平安時代に調査地には「親忠家平伯耆護堂」があったとされています。しかし、その実態はよくわかっていません。ただ、隣接町内に後白河上皇の御所(六条第)があったとされ、その周辺には院近臣(家来)や、源氏一族の屋敷が所在していたと考えられています。周辺で行われた発掘調査でも、平安時代～鎌倉時代の遺構が数多く確認されており、文献史料・出土資料共に、平安時代～鎌倉時代に活発な土地利用がなされていたことが確認できます。しかし、室町時代、特に応仁の乱以降は記録があまり残っていません。

天正19年(1591)に、本願寺(西本願寺)が現在の位置に移転すると、調査地一帯は寺内町として再び発展します。元禄8年(1695)には僧侶の学校(学林)が設けられ、宝暦12年(1762)に刊行された『京町鑑』には、現在の地名に通ずる「学林町」の名が見えます。また、調査地一帯は天明の大火(1788)と、元治の大火(1864)の2回にわたり、焼亡しています。様々な史料からは、大火で被災する度に復興してきた様子がうかがえます。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査では、平安時代後期(第3面)、平安時代末期から鎌倉時代初頭(第2面)、室町時代末期から江戸時代(第1面)の遺構・遺物を確認しました。

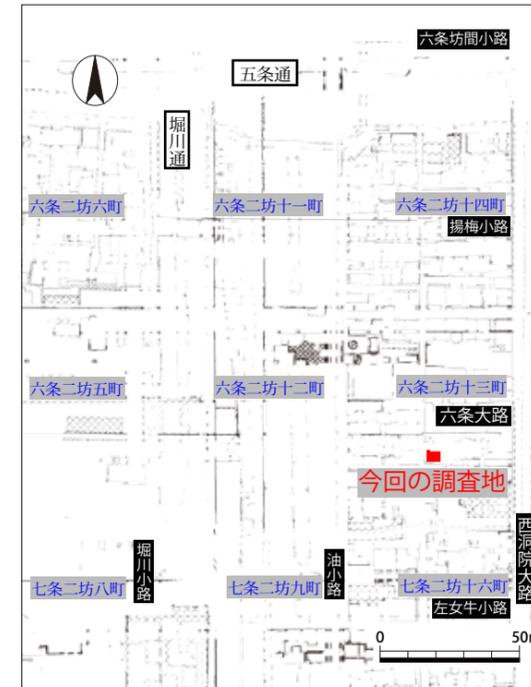
今回の調査で確認できた最も古い遺構は、第3面で検出した平安時代後期の井戸(図3)です。一辺1.2～1.4mの隅丸方形、検出面からの深さは0.85mを測ります。また、内部は円形状に一段深くなっており、曲げ物を井戸枠として利用していたと考えられます。

第3面の土層では、平安時代末期から鎌倉時代初頭の整地層を確認しました。調査区全体に広がるこの整地層の上面で、ピットや土坑を多数検出しました(図4)。これらの中には、埋土に土師器片などの遺物を大量に含んでいるものがありました。

鎌倉時代後期から室町時代の遺構・遺物はあまり見られません。次に調査地で人々が生活していた痕跡が明瞭に確認できるのは、室町時代末期から江戸時代です。この時期に再度整地をしており、この整地層上面でも多くの遺構を確認しました。江戸時代の井戸(図5)は、内部径が約1mあります。井戸枠は人頭大かそれより一回り大きな石で構築され、裏込めには拳大の石が詰められていました。また、多数確認されたピットの中には根石を持つ柱穴がありました。

調査区の東側は、江戸時代の大火で被災したゴミを廃棄した大きな土坑でした。被害の甚大さがうかがえます。

今回の調査で確認された井戸や柱穴は、それぞれの時期に人々が活発に土地利用をしていた証左となります。その具体的な様相の一端を明らかにしたと言えましょう。今後この地域における、さらなる調査の進展が期待されます。(佐藤 拓)



※ 黒字は現在の通り名、黒枠白字は平安時代の道路名。

図1 調査地周辺地図

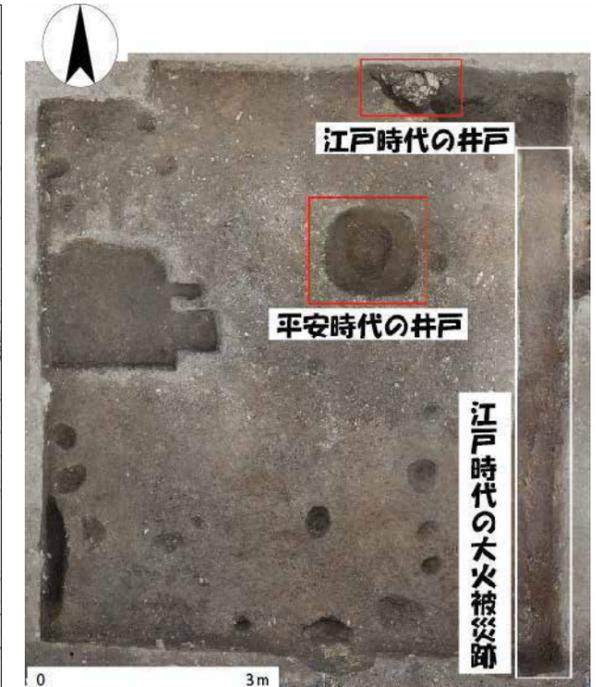


図2 調査区全景(第1面、オルソ画像)



図3 平安時代後期の井戸(南から)

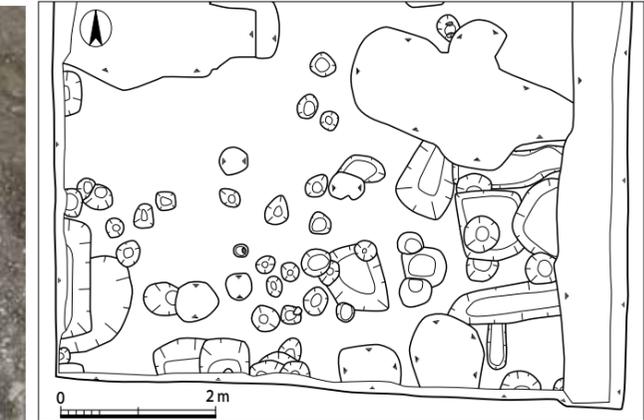


図4 調査地南半平面図(第2面)

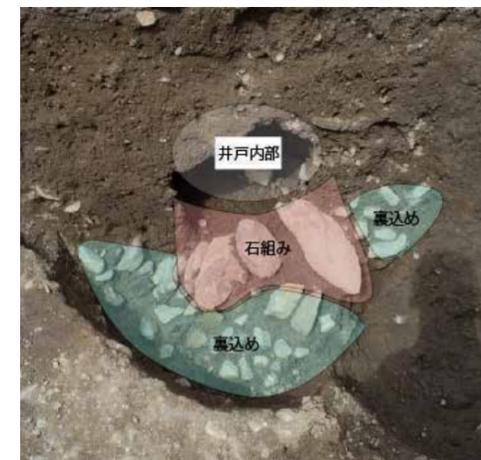


図5 江戸時代の井戸(南西から)



図6 江戸時代の火災処理土坑(一部分、北西から)